

ノヴァーリス 「クリングゾールのメルヒェン」新しき聖書

—鉦物描写の観点から「ヨハネの黙示録」と比較して

上 野 ふ き

はじめに

18世紀後半のドイツは「メルヒェン・ブーム」を迎え、さまざまな娯楽的なメルヒェンがあふれたが、1795年、ゲーテ（Goethe）が『ホーレン』*Die Horen* 誌（10月号）に掲載した『ドイツ避難民閑談集』*Unterhaltungen Deutscher Ausgewanderten*の最後を飾る「メルヒェン」*Das Märchen*を皮切りとして、文学的な創作メルヒェンが書かれていくようになった。ティーク（Tieck）やアイヒェンドルフ（Eichendorff）、E. T. A.ホフマン（E. T. A. Hoffmann）、アルニム（Arnim）など、ロマン派の多くの詩人がゲーテに触発されて、いくつものメルヒェンを書いている。ゲーテの「メルヒェン」は謎に満ちたストーリーであり、当時の知識人たちにセンセーショナルを巻き起こした問題作である。多くの人が様々な解釈を行ったのであるが真に解釈した者は少なかった。ゲーテの「メルヒェン」における解釈史を論じている小林健祐によれば、ノヴァーリス（Novalis 本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク Friedrich von Hardenberg 1772-1801）が最初の真の解釈者であった¹。

ノヴァーリスは解釈を行っただけでなく、「メルヒェンはいわば詩のカノンである——詩的なものは全てメルヒェンのようでなければならない」（N. 3: S. 449 [940]）とメルヒェンに高い地位を与え、ゲーテの「メルヒェン」を基に『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン（邦訳：青い花）』*Heinrich von Ofterdingen*（以下『オフターディンゲン』と略す）の第一部最終章に「クリングゾールのメルヒェン」というそれだけで完結した小作品を書いている²。両者を比較すると類似した部分が多く見つかる。例えば物語全体の設定を考えても、

両者ともに悩める姫がいて、それと結ばれる若者がいる（百合姫＝フライア、美しい若者＝エロス）。またゲーテの「メルヒェン」においては川を境に両岸と地下が分裂しており、「クリングゾールのメルヒェン」においては天上と地上と地下世界が分裂している。それらは後に統一される。その統一のために働く者（ランプの老人＝ファーベル）がいて、犠牲になる者（緑の蛇＝母）がいる。

ゲーテは『植物のメタモルフォーゼ（1790年）』*Die Metamorphose der Pflanzen zu erklären*『色彩論（1810年）』*Zur Farbenlehre*など自然科学に関した論文も多く書いており、文学にとどまらず自然科学の分野にも貢献した詩人である。そのようなゲーテの関心を示すものであると思われるが、彼の「メルヒェン」では鉱物と光の作用がふんだんに使われている。例えば金貨を生み出す鬼火、その金貨を食べるとエメラルドのように輝き、最後は宝石のかけらに変わる緑の蛇、実体は力を持たず影が力を持っている巨人、金、銀、銅、合金の王、「すべての石を金に変え、すべての木材を銀に変え、すべての生命のない動物を宝石に変え、すべての金属を破壊する不思議な性質」（GM. 4・1: S. 526）を持ったランプなどがある。特に最後の場面は壮麗である。川には大きな宝石の橋脚を持った華麗な橋がかかり、川岸には黄金に輝く聖堂が立っている。そのなかには銀の祭壇があり、壁龕には金、銀、銅の王が立ち並んでいる。前庭には「赤みがかって輝く石の巨大な堂々たる立像となって」（GM. 4・1: S. 548f.）日時計と化した巨人が立っている。こうしたさまざまな鉱物のモチーフもノヴァーリスの「クリングゾールのメルヒェン」の模範となっている。例えば物語の最初の天上界の光景は、植物は無機物の金銀宝石であり、花や噴水は雪や氷の結晶であり、作中には炎の中に花を育てる庭師として亜鉛が、灰をかき集める者としてトルマリンが、電気を起す者として金が登場する。そして最後には、ゲーテのメルヒェンでも平和が訪れたように、下記の詩にある天上界、地上界、地下世界が統一された太陽を必要としない光の世界が訪れる。

永遠の国が築かれた、
愛と平和のなかで争いは終わり、
苦痛の長い夢は過ぎ去った、

ゾフィーは永遠に心の司祭。(N. 1: S. 315)

この世界は、愛（エロス）と平和（フライア）が支配し、運命の糸である「決して切れない黄金の糸」(N. 1: S. 314) をファーベルがつむぐ故に、この世界は恐怖や苦痛のない国となるのであるが、その際、反乱を起した書記や敵の残党はアラバスターと黒大理石のチェスの駒に変えられ、三人のパルツェンとスフィックスは斑岩と玄武岩でできた寝台の柱となる。

このようにノヴァーリスのメルヒェンが、ストーリーの点においても描写の点においてもゲーテから影響を受けていることは確かである。しかしそれだけでなく、鉱物のモチーフや情景描写はゲーテよりも聖書から影響を受けているのではないかと考え、その類似点を探り、さらにノヴァーリスにおける聖書の意味を説くことがこの論文の趣旨である。

1. 「クリングゾールのメルヒェン」と「ヨハネの黙示録」

「クリングゾールのメルヒェン」は、まだ天上と地上と地下世界が統一されていない分離した状態から始まる。そして、新しい永遠の世が訪れる時を待っている王アルクトゥーレと娘の王女フライアが住んでいる天上の王宮と町は、宝石の花が咲き乱れる幻想的な風景をなしている。

山の頂には町があり、その山をかこむ、凍りついた海にはあらゆるものが映しだされていた。[...] どの窓にも愛らしい鉢が並び、なんとも優美に輝く、さまざまな氷と雪の花が咲き乱れていた。とりわけ、王宮の前の大広間にある庭園は壮麗で、金属の木々や水晶の草花が茂り、色とりどりの宝石の花や果物がたわわに実っていた。その多様で愛らしい姿と躍動感あふれる光と色が加わって、それは見事な光景を呈していた。そして庭園の真中高くそびえる、凍りついた噴水によってその庭園の壮麗さはきわみに達していた。
(N. 1: S. 291)

また、王女フライアが座っている玉座は「硫黄の大きな結晶に精巧な細工を」施

したものである。これに対して、ヨハネの黙示録4の「天上の礼拝」では次のような描写がある。

すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っているお方がおられた。その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。[...] また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようなであった。(ヨハネの黙示録4. 2-6)

新しい都、「新しいエルサレム」の描写は、ノヴァーリスがモデルとしたのではないかと思われるほど描写が似ており、また、ノヴァーリスの作品以上に輝かしい鉱物の世界である。

天使が [...] 聖なる都エルサレムが神のもとを離れて、天から下って来るのを見せた。都は神の栄光に輝いていた。その輝きは、最高の宝石のようであり、透き通った碧玉のようであった。[...] 都の城壁は碧玉で築かれ、都は透き通った純金であった。都の城壁の土台石は、あらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。また、十二の門は十二の真珠であって、どの門もそれぞれ一個の真珠でできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。(ヨハネの黙示録21. 9-21. 21)³

確かにノヴァーリスの「クリングゾールのメルヒェン」はゲーテのメルヒェンを模範にしている。しかし、ゲーテの「メルヒェン」には金、銀、銅の王が登場するなどして、キリスト誕生以前の古代ギリシアのイメージが浮かんでくるのに対し、ノヴァーリスの「クリングゾールのメルヒェン」では先程描写したように、新しいエルサレムのイメージが感じられる。ノヴァーリスは「クリングゾールのメルヒェン」の描写を意図的に「ヨハネの黙示録」に似せて作ったのではないだ

ろうか。

2. 新しい聖書

『オフターディンゲン』の第八章に、主人公ハインリヒがマティルデと恋に落ちたとき、彼女を通して彼に神の姿が啓示され、「神のあふれる愛」(N. 1: S. 288) が伝達されたという場面がある。ここからはノヴァーリスが婚約者ゾフィーを失い苦悩するうちに、彼女に対する愛が女性に対する恋愛感情から、愛という宗教に変わった様子がうかがえる。なぜならハインリヒと同じようにノヴァーリス自身がゾフィーを愛するという行為から啓示を受けたからである。これをいわゆる「ゾフィー体験」と言う。「私はゾフィーに宗教を抱いている。——愛ではない。心に依存せず、信仰に根ざした絶対的な愛は、宗教である」(N. 2: S. 395 [56])。この断章は『ヘムステルホイスとカント研究 (1797年)』 *Hemsterhuis und Kant-Studien* に収められており、1797年3月のゾフィーの死の直後に書かれている。ノヴァーリスは亡くなったゾフィーのことを考えることによって、彼岸の世界、より高い世界とつながり合えると考えていた。ノヴァーリスにとってゾフィーがイエス・キリストの役割を担うこととなり、「愛は絶対的な意志があれば宗教へと変わりうる。」(N. 2: S. 395 [57]) というように、ゾフィーに対する愛そのものが宗教となった。そして、ゾフィーの死以来ノヴァーリスは愛を宗教の根源と考え、その愛は決してキリストだけから得られるものではないという自由な宗教心に至る。

このようにノヴァーリスの宗教がキリスト教のみにとどまるものではなかったとはいえ、父がヘルンフト派の敬虔主義者であり、家庭が厳格であったことから、ノヴァーリスの宗教の根底には敬虔主義が根ざしている。敬虔主義とは経験と実践によって神を自分の内に認めるという内面の体験を宗教の基盤とし、そして自分の内面に神からの啓示を求め、個人の感情を重視する、聖書を中心とした信仰形態である。そのように考えると黄金時代の到来を描き、ノヴァーリスの鉾物幻想とも言われる「クリングゾールのメルヒェン」と新しいエルサレムを描いた「ヨハネの黙示録」中の天上の風景描写が類似していることも偶然ではないよ

うに思われる。

そもそも書記による反乱が起こり、やがて永遠なる愛と平和の、太陽をも必要としない光の世界が訪れる「クリングゾールのメルヒェン」と、主によって最後の審判が行われ、サタンの敗北の後、「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも苦労もない」(ヨハネの黙示録21. 4)⁴、「それ[都：上野]を照らす太陽も月も、必要ない」(ヨハネの黙示録21. 23)、新しい都エルサレムの再建を語る黙示録の流れ全体が似ているのであるが、ノヴァーリス独自の表現とされていた美しい鉱物幻想の世界が黙示録のなかに見出されることは興味深い。M. タールマンは「クリングゾールのメルヒェン」と「ヨハネの黙示録」の類似について次のように述べている。「それ[クリングゾールのメルヒェン：上野]は[……]勝利を収め、世界を焼く劫火へ飛び込み、そして自ら消滅する地下世界を通って行き、そして最後に地球、月の世界、アルクトゥール王の国が幸福の千年王国につながる」⁵。

ロマン派の動きのなかには「新しい宗教」、「新しい聖書」をつくろうとする傾向があった。主にF. シュレーゲル(F. Schlegel)の考えである。「私は新しい宗教を打ち立てるか、もしくは、むしろそれを伝える手助けをしようかと思っている」(F. シュレーゲルからノヴァーリス宛の手紙1798年12月2日 N. 4: S. 50 7)。しかし1798年12月10日の返信には、「きみの宗教と聖書についての考えに今はまだ同意しないよ」(N. 4: S. 269)と書かれているように、ノヴァーリスはF. シュレーゲルの宗教観を快く思っていなかった。しかし、1799年から1800年の間に書かれた『断章と研究』のなかで次のように考えが改められている。

福音はひとつという考え。福音はもっとたくさん考えられないだろうか。福音書はどうしても歴史の形をとらなければならないのか。歴史は器にすぎないのではないか。未来の福音もありうるのではないか。

この目的のためにティーク、シュレーゲル、シュライエルマッハーと協同すること。(N. 3: S. 557 [9])

実際に、『オプターディンゲン』の全体を凝縮していると考えられている「クリングゾールのメルヒェン」が「ヨハネの黙示録」と類似的な終幕を迎え、さらに

さまざまな宗教が和解するテーマは、聖書を乗り越えた聖書をつくろうとするF. シュレーゲルと共通の志があったことがうかがえる。ノヴァーリスが神秘主義や錬金術、自然科学、自然哲学にどんなに傾倒していたとしても、ただ、キリスト教だけを信仰する教徒ではなかったとしても、ノヴァーリスの根底にはやはり聖書が絶対的な権力を持って横たわっている。次にノヴァーリスにとって新しい聖書がどのように捉えられていたのか考察してみたい。

3. 物語としての聖書と歴史

次の三つの断章からノヴァーリスにとって聖書は一種の歴史であり、そしてその歴史もメルヒェンでなければならなかったということが分かる。そして歴史家と詩人は同一視され、使徒として扱われる。「歴史家は講演でしばしば話し手にならなくてはならない。そして完全な歴史は福音であるから、彼は使徒を演じる。」(N. 3: S. 586. [214.])「あらゆる人間の歴史は聖書であり、聖書になるべきである。」(N. 3: S. 321 [433.])「歴史は時とともにメルヒェンにならない——歴史は始まりの姿に戻る。」

通常私たちが思い浮かべる歴史とは、史、時勢の変遷や発達の過程を記録したものであり、現実的な政治や文化、社会の経歴を示すものである。過去に起こった出来事のみが歴史と呼ぶに値する。しかしドイツ語の「Geschichte」の語義は多様で、グリムのドイツ語辞典によるとそれには全部で九項目もの意味があり、第一項目から過去とは関連のない「神の摂理、偶然、出来事」という意味が記されている⁶。ノヴァーリスにおける歴史も出来事にとどまるものではなく、私たちが思い浮かべるような記録としての歴史ではない。

それがよく分かる言葉として、ノヴァーリスは、『オフターディンゲン』の第五章で歴史を司る隠者に次のように言わせている。「歴史家であるものは当然詩人でもなければならない」(N. 1: S. 259)し、「詩人の童話の方が、学者の年代記(Chroniken)より多くの真実を含んでいる」(ebd.)。このように記録者よりも詩人を称揚する姿勢は「クリングゾールのメルヒェン」においても見ることができる。

「クリングゾールのメルヒェン」の登場人物に、一面的合理主義的⁷な悟性である書記がいるのだが、彼は机に向かって「全てを精確に記述する」(N. 1: S. 295) 仕事を行っている。机の横には祭壇があり、そこには水盤を手にしたゾフィーが立っている。書記は記述が終わると紙をゾフィーに渡す。ゾフィーがその紙を水盤の水に浸すことによって検査が行われる。合格したいくらかの文字は消えずに残るので、書記は合格した紙を帳簿に閉じこむ。彼はこのような作業を繰り返している。書記はできる限り「精確 (genau)」なことを書こうとしているが全文の合格は難しい。「ときには自分の骨折りが無駄になり、すべてが消えているのを見たときはやりきれないふうだった」(N. 1: S. 294)。

そのような書記はどのような人物なのだろうか。「書記は羽ペンを動かしながらも、とても良い記憶力を持ち、あらゆる出来事を覚えているジニスタンにやむをえず尋ねる羽目になると、いつもしかめ面になった」(N. 1: S. 296) という言葉から、また、旅に出ることになった「特にジニスタンが別れに際して、この家の年代記 (die Chronik) を詳しく記した手帳をくれたので、[...] 書記はどうにも喜びを隠せなかった」(ebd.) という言葉から、書記が過去の知識を蓄えた記録者、しかもほかの誰にも引けをとらない唯一の記録者になることを望んでいることが分かる。しかし書記の記録しているものは、先程引用で挙げたように隠者の言う「学者の年代記」でしかない。

なぜなら、書記が書いたものは常に一部が消えていったのに対し、詩を代表しているファーベルが書記の紙に適当に書いたものは「燦然と輝き、一字も消えずに水盤から引き上げられた」(ebd.) からである。これはファーベルの記述したことが全て「精確 (genau)」であったことを示している。ここに見られるように書記とファーベルの記したものに対する水盤の検査の対比から、書記がどんなに策を凝らしても詩人にはかなわないということが分かる。

では、なぜ歴史家が学者でなく詩人でなくてはならないのだろうか。隠者は歴史のあり方について次のように述べる。

詩人の童話の方が、学問的な年代記よりはるかに多くの真実を含んでいます。
たとえ、登場人物とその運命は作り話であっても、それをつくる感覚は真実

で自然なものです。私たちが自分の運命を重ねて見ている登場人物がかつて本当に実在したかどうかということは […] どうでもよいことなのです。私たちは時代の現象に隠れている偉大で素朴な精髓（Seele）を直観したいと望むのであって、この願いが叶うなら、外観がたまたまどんなものであろうと気にする必要はないのです。（N. 1: S. 259）

つまり隠者にとって、現実界で起こっている具体的な出来事の方が虚構でしかなく、その間に隠れているものこそが真実ということである。そしてその「偉大で素朴な精髓」は一瞬のうちに直観で把握すべきだという。ノヴァーリスの歴史観は観念的なものであるが、彼のこのような歴史観に対してゲーテの興味深い箴言がある。

歴史家と詩人とではどちらがすぐれているかという問いは、絶対に提出してはならない。この両者では競争にならないことは、競争者と拳闘家の場合と同様である。それぞれに別の栄冠がふさわしいのだ。（GM. 17: S. 765）

ゲーテもこの断章で、歴史家と詩人を同等に比較し得る対象に挙げていることから、両者の間に類似関係を認めていることは確かである。しかし両者は別のものであり、それぞれにそれぞれの価値を認めている。なぜなら「歴史も、歴史が表すべき宇宙も、現実的な部分と観念的な部分を持っている」（GM. 17: S. 881）からである。現実的な部分には歴史家が、観念的な部分には詩人が当てはまるということだろう。ここで、ノヴァーリスはゲーテをモデルにしているといわれている詩人クリングゾールに、上記したゲーテの引用と似た言葉を言わせている。「どちらか一方だけをとり、他方を忘れてしまわないように十分気をつけなければならない。一面だけを知っていて、もう一方の面をないがしろにするものもたくさんいるがね。」（N. 1: S. 280）ここまでの台詞ならゲーテとクリングゾールは同じ考えを持っているかのように思われるが、クリングゾールは次のように続ける。「しかしその二つを併せることができるのだし、またそうしてこそ何事もうまくいくのだ。」（ebd.）ここに、ゲーテとノヴァーリスのあらゆる対象の認識

方法の類似と違いを見ることができる。ゲーテとノヴァーリスが同じように万物を観察したとすれば、ゲーテが可視的物体とその奥に潜む汎神論的なものの両方に対等の価値を認めるのに対し、ノヴァーリスは可視的物体を奥に潜む汎神論的なものに融合させてしまうのである。

それ故ノヴァーリスは歴史とメルヒェンを同一視する。

真のメルヒェンは、同時に予言的表現——理想的表現——絶対的に必然的な表現でなければならない。真のメルヒェン作家は未来の予言者である。[…]
(歴史は時とともにメルヒェンにならなければならない——歴史は始まりの姿に戻る。)(N. 3: S. 281 [234])

「クリングゾールのメルヒェン」でファーベルがパルツェンたちに代わって黄金時代の運命を二度と切れない黄金の糸で紡ぐ者となったように、詩人は黄金時代を予感するとともにそれを創り出さなければならないのである。メルヒェンは創作されなければならない。物語を創作する者は詩人である。ノヴァーリスの考える世界の歴史が現実とは異なった虚構世界であるが故に歴史家は詩人ということができるのである。

また詩人は心情を扱う者故に歴史家となり得る。

ハインリヒ：「寓話と歴史はなんともくねくねと曲がった道を互いに最も心から結びつき合って、とっても奇妙な衣装を着て歩んでいます。すると聖書(Bibel)と詩学は同一の軌道をめぐる星座ということになります。」(N. 1: S. 333)

ジルヴェスター：「まったくきみの言うとおりで。[…] きみの穢れなき心はきみを預言者にするのだ。[…] いずれ一切のことがきみには了解できるようになり、素朴な言葉や物語にも宇宙が開示されるという偉大な判例が聖書に見出されるように、世界とその歴史はきみにとって聖書(Heilige Schrift)となるのだ。」(N. 1: S. 333f.)

これは、ハインリヒとジルヴェスターの会話であるが、ここで歴史と聖書が同じものとして扱われている。そしてその会話にH. J. バルメ (H. J. Balme) は「詩学と聖書は同様に、宇宙を解釈する心情を通して宇宙の啓示を象徴的に翻訳したものである⁸⁾」という注をつけている。つまり心情とは宇宙を解釈する能力を持っているのである。そして「詩は心情⁹⁾——すなわち内的世界総体の表現である」(N.3:S.650 [553]) という断章が示すとおり、詩は心情を表現する手段である。そして必然的に詩を詠う詩人は宇宙を解釈し得る心情を有する者となる。そして、「クリングゾールのメルヒェン」でファーベルが活躍したように、詩人は「新しい黄金時代」を作り上げることができるのである。

おわりに

これまで見てきたように、ノヴァーリスはメルヒェンという、より抽象的な形態を重要視し、それに人間の歴史と新しい聖書を重ね合わせている。その聖書には「ギリシアや東洋の、聖書とキリスト教の伝説などがインドと北欧の神話の連想や暗示と結び合わされるはずであった」(N. 1: S. 366) とあるように、あらゆる思想が和解した、ひとつの宗教観が見出される。ノヴァーリスはメルヒェンを用いて新しい聖書を作り、この世に新たな信仰の可能性を生み出そうとしたのである。

使用テキスト

Novalis: NOVALIS Schriften. Hrsg. von Paul Kluckhohn und Richard Samuel, unter Mitarbeit von Heinz Ritter und Gerhard Schulz. Stuttgart (Kohlhammer) 1977-1988 (引用後の()内にN.と略記し本文中に巻数、頁数を示し、[]には断章の番号を示した。)

Goethe, Johann Wolfgang: Samtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Hrsg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Gofert u. a. München (Hanser) 1985-1988 (引用後の()内にGM.と略記し本文中に巻数、頁数のみを示す。)

注

- 1 小林健祐:『メルヘン』解釈序説——歴史的展望と可能性——〔日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』第13巻, 1971〕138頁参照。
- 2 Ursula Ritzenhoff: Erläuterungen und Dokumente. In: Novalis: Heinrich von Ofterdingen. Reclam Stuttgart 1999. S. 75. 参照「ノヴァーリスは「クリングゾールのメルヘン」のために二つの模範作品を使用した。それがヴィーラントの三巻本 of 作品集『ジニスタンもしくは精選された妖精と霊のメルヘン』とゲーテの『メルヘン』である。」
- 3 島田昱朗: 書の鉱物誌 (東北大学出版会) 2000, 28-31頁参照。
- 4 聖書 新共同訳 (日本聖書協会) 2004
- 5 Thalmann, Märienne: Das Märchen und die Moderne: zum Begriff der Surrealität im Märchen der Romantik. Stuttgart 1961. S. 31.
- 6 Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. 4 (1-2). Bd. Leipzig 1897. S. 3857-3866 参照。
- 7 Balmes, Hans Jürgen: Kommentar. In: Novalis: Werke, Tagebücher und Briefe Friedrich von Hardenbergs. Hg. v. Hans-Joachim Mähl und Richard Samuel München Wien 1999. S. 173. において書記は次のように説明されている。"Schreiber: nach der kunappen Selbstinterpretation des Marchens in Brief an Friedrich Schlegel *der Petrificirende und Petrificirte Verstand* eines einseitige dogmatischen Rationalismus."
- 8 Balmes: a. a. O., S. 182. また、岩波文庫の『青い花』に注をつけている青山隆夫によると「詩は絶対的なものを認識する機能をもつゆえに、聖書と同じく、宇宙が啓示するものを、心情をとおして象徴的に翻訳するという意味を持つ。」(343頁)
- 9 Balmes: a. a. O., S. 127. によると「心情は [...] 人間のあらゆる精神的で心的な能力の総体を意味する。」

(うえの ふき ドイツ文学)